① 毎月25日発行

山と博物館

第５３巻　第９号　２００８年９月２５日　　市立大町山岳博物館

特集　「第６回　日本山岳画協会大町展」９／13(土)～11／３(月)

牧　潤一　「エベレスト山」 油彩・３０号

第６回 日本山岳画協会大町展 開催にあたって

日本山岳画協会

日本山岳画協会は、昭和11年（１９３６）日本山岳会を母体として、好んで山を描く画家の集団として結成されました。創立会員には中村清太郎、足立源一郎、石井鶴三、茨木猪之吉ほか計12名が参加して発足し、本年で七十二年目を迎えて居ります。その間、戦中戦後を通じ組織を守るため幾多の苦難を経験しながらも、心ある先人たちの努力の積重ねによって今日に至りました。

その作品の主題は、山頂・山中とか狭く限定せず、遠望、山麓、渓谷、湖沼、草木、禽獣等の山に属するものはもとより天象、人生、神話、伝説の類まで、国内外に広く題材を求めたものであります。

当会は毎年東京に於いて定例展を開催して居りますが、昭和59年（１９８４）以降略々五年毎に此処『大町山岳博物館』で特別展を開催しております。今年はその第六回目にあたり、同館のご好意により一ヶ月余りに亘り展覧会を開催させて頂くことになりました。

ご来館の皆様に私ども会員の作品をご高覧頂けますことを、深い喜びと感じております。併せて、夫々の作品にこめた作者の心情をお汲み取り願いますれば、大変有難く存じます。

大町山岳博物館並びに関係各位のご厚意とご協力に対し、会員一同心から感謝申し上げる次第です。

峡谷の村

岩切　岑泰

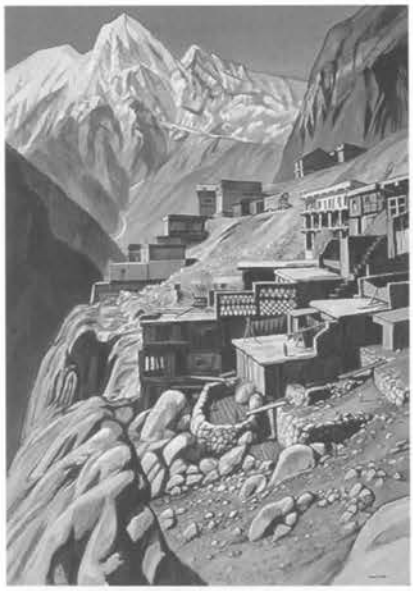
この村を最後に訪れたのは、アメリカで起きた同時多発テロ事件の年、二〇〇一年九月のこと。

それまで平和であったパキスタンが、その日を境にして全土的に歴史的な悲運に見舞われることになった。その事件を知ったのは、イスラマバードから成田国際空港に帰着した九月十一日、丁度その日であった。あれから七年の歳月が経過したが、未だにパキスタンの国情は落ち着かないようである。

思い返せば、この村に立ち寄ったのは六回ほど。この村は、パキスタンを南北に貫き中国国境に繋がるカラコルムハイウエイの山深い峠近くに在り、特に印象の強い村であった。

その一つが、あまりにも小さな菜園であった。乾燥地帯であるこの山峡の地に生きて行く為、わずかな土を大切に耕し、緑の作物を育てようとしている村人の姿は健気であった。厳しい大自然の中に在り、倹しく生きようとしている姿は感動的であった。

今、思うことは、テロに振り回されている人間たちの不幸であり悲しさである。自然と共生しながら、穏やかで平和な人生を全うする事は許されないのであろうか。今もこの峡谷で、小さな菜園を守り育んでいるであろう村人の姿が忘れられないでいる。



峡谷の村

五色ヶ原

上田　太郎

昨年九月、五色ヶ原の紅葉を絵にしようと室堂から立山、雄山、獅子岳を経てザラ峠に差し掛かった時の話である。実は岳友M君からザラ峠には赤い小石が無数に見受けられるがあれは何故でしょうねと、不思議な話を聞き、ずっと興味を持ち続けていたのである。現場で休息。早速周囲を見渡して驚いた。

一面赤い小石を敷き詰めた所が随所に在る。小石の大部分は赤い色であり、血の色にも見える。私の空想癖が頭をもたげた。御存知、戦国武将の佐々成政厳冬期の北アルプス越えの話である。織田信長には絶大なる信頼を得乍ら、秀吉が天下人となってからは、とかくその存在は軽く見られていた。領地富山に於いては、北に上杉、西に前田と一触即発の危機をはらんでいた。成政は藁をもつかむ思いで、遥か東方静岡の徳川家康に見参し秀吉打倒を進言すべく、天正十二年・富山城を出発立山、ザラ峠、針ノ木、大町というルートでアルプス越えを計画した。近代登山装備をもってしても容易でない無謀な行動である。十二日間に亘る難行苦行の末、成政の得た結果は…。失意の成政一行は来た道を引き返す以外ないのである。往きも復りもこのザラ峠で一行は休息したに違いない。はるか眼下に広がる故郷越中トナミ平野・その彼方に望む日本海に向かって、空しくも厳しい戦国の世をのろったかも知れない。

私は赤い小石を三個ポケットに入れ、五色ヶ原へ急いだ。この赤い小石は全て成政一行の血と汗と涙の結晶だと確信し乍ら。

五色ヶ原

初秋の雲の平

江村　真一（まさかず）

九月の雲の平が描きたくなった。前日、新穂高温泉に泊まり、鏡平へ登る。先を急ぎたいが、槍ヶ岳と池塘を描かずに通過できない。鏡平泊。翌日、小雨の中を出発。寒いくらいで急登にはもってこいだ。早々に弓折岳稜線に出る。尾根が広くなって残雪がある地点で、にこにこしながら近寄ってくる登山者がいる。なんとM山岳会の仲間、S君だ。山中での再会、それも一家全員に会えるとは、嬉しい限りだ。これから訪れる予定の雲の平・高天原を廻って来たという。最新情報を聞き、互いの無事を祈ってお別れ。雨も止み、快調に歩を進める。双六岳山腹の巻道は、残雪も多く、お花畑のなんと見事なことか。黒部川源流へ下降し、祖父岳へ登り始めると雨足が強くなる。台上に入って周辺には誰もいない。この時期、これほどの入山者しかいないのか。日本庭園、テント場入口を過ぎ、見えているはずの山荘が、雨とガスで全く見えない。突然目の前にそびえ立つ大きな山荘が現れて、長い長い一日が終わった。

昨日の雨が止み、晴れる。雲の平からの薬師岳、黒部五郎岳、三俣蓮華岳、水晶岳、全ての山々が顔をそろえている。ゆっくり写生をして、高天原へ。景色は黄色半分の初秋だ。温泉からさらに奥へ進み、竜晶池へ着く。静寂の中、薬師岳を背に、ひとり身を置く。ゆっくり温泉に入り、目的を十分に達した。さらに、帰路の水晶池、快晴の三俣蓮華岳、双六岳からの眺望には、時間のたつのも忘れて見入ってしまった。

山　湖

川の流れのように

小高 民江

梓　川

水のある風景をみずゑで描きたくて年末から上高地に入った。雪があり新芽が出る頃なら寒色だけでなく暖色もある。晴れて斜めに光が射せば、水や雪の上に映る空や立木の影が鮮やかな色彩で輝く。しかしそんな美しさを見せてくれる幸運の女神にはめったに会えない。年が明けて帰る日にやっと晴れ上がった。鮮やかな色彩がいっせいに目に飛び込んできた。今まで鉛の様だった川も空の色を映し水色になった。帰路、田代橋を渡った所で見えたのがこの風景だ。焼岳も見える所だが、この絵には描いていない。

流れる川は複雑で一筋縄ではいかない。岩にぶつかり、くだけ散る水しぶき。ゆれる波紋。水の動きを表現するのはやっかいだ。細部にこだわりすぎると、「木を見て森を見ず」になってしまう。色を混ぜすぎては、透き通った水が濁ってしまう。透明水彩がにごりゑになり始末に負えない。描いている時は良い調子だと思っていても、水が乾けば魔法が解け、色が褪せ、輝きもけむりと共に消えてしまう。そんな試行錯誤を繰り返し、紆余曲折。川の流れのように辿り着いたのがこの『梓川』だ。

独標から西穂高岳

熊谷 榧

北穂高には若いときから再三登っているが、西穂高には最近出した画文集「はじめての山」に書いたように一九五五年に奥又白から登って以来あまりなじみがなかった。

ところがこの十年ばかり双六小屋の小池潜さんの紹介で、飛騨の高山で二年毎に個展をするようになってから、五月の個展の会期中に抜け出して、飛騨山岳会の人の案内で何度か西穂高の途中まで登っている。はじめて行ったときは新穂高温泉のロープウェイを下りて、残雪の中を西穂山荘まで登ったが、どしゃぶりの雨で、小屋泊りとなってしまった。

二度目に行ったときは天気に恵まれて、この絵のように独標まで足をのばして西穂高をスケッチすることが出来た。二〇〇四年のことだが、最近とみに足腰が弱くなり、「登りは息が切れ、下りは膝が痛い」のではこれが最後の西穂高かもしれない。

もう一点の「残雪の笠ヶ岳」もこのとき西穂山荘に登りながら、何度も何度も笠ヶ岳・双六岳の方を振り返りながらスケッチした何枚かの中から描かれた油絵だ。

小品として出している陶絵「大キレットから槍」「秋の涸沢」「北穂から前穂高」は二〇〇六年、これが最後の北穂行のときの水彩スケッチをもとに作ったものだ。

独標から西穂高岳

北アルプス冠雪

後藤 三男

四季折々に豊かな表情を見せてくれる安曇野の風光に魅せられ、この地に取材を続けて四十余年になる。いつもながら大糸線の車窓からパノラマのように眺められるアルプスの峰は秀麗な姿を見せ、春は一帯に広がる水田に鏡田となって残雪を映し、夏は目にしみる緑の山、秋の紅葉、更に冠雪した沈黙の冬山へと表情を変えて清冽な空気に満ちた雄大な自然の造型を詩情豊かに伝えてくれている。広大な安曇野を辿って岳都大町に至ると東西から迫る山地に挟まれるように平地は終息してその西側に後立山三銃士（爺・鹿島槍・五竜）に続く山稜が屹立して美しい山容を見せてくれている。

「北アルプス冠雪」を取材した地は、北大町から蝮坂を登って長野、白馬道に至る大塩・小塩地区から見通したところで、季節は雪晴れの続く二月下旬ころ、除雪してある生活道路付近一帯は雪に埋もれ、それでも春を待つ雑木林は、新芽の包をピンク色に輝かせ寒気の中で雪との対象的な配色である。更に風が運んでくれる季節の足跡を早め、三月ころから雪解け進み高山の雪渓と麓の新緑はメリハリのある、この地特有の風土感を見せてくれる。

北アルプス冠雪

槍ヶ岳遠望

須藤 卓男

最近やっと自由の身になり、すきな時期に山に出かける機会が得られるようになった。毎年のことではあるが、九月下旬に槍ヶ岳山荘で絵画教室が開催され、行くようにしている。前回までは、上高地からの登山が定番であったが、この年はコースを変え、燕岳よりアプローチした。

振り返ってみると今までは、あまり天候に恵まれたとは云えなかったが、今回の燕から穂高連峰の山並は、山歩きの醍醐味を充分に満喫させてくれるものであった。

山の織りなす色彩と陰影の風景を、スケッ

チしながら槍へと歩を進めた。しかし山の光景は時間の経過と共に、色や形など刻々と変化し、とまどうことが多い。

この時の光影の一コマと、脳裏にやきついた情景とをたずさえて、キャンバスにむかうのだが、なかなか思うようにゆかず、なやんでいる。

雲上の槍ヶ岳

マッターホルン

武井　清

東西南北からみたマッターホルンを昨年秋の個展に出品した。東壁は右側のヘルンリ稜を一八六五年に、ウィンパーの一行が初登頂したことで有名。（筆者も一九九五年、このルートで登頂）　北壁は世界三大北壁（アイガー、グランドジョラス、マッターホルン）の一つとして有名である。　南壁はイタリアのチエルビノからみたもので、これがマッターホルン？　と思われるほど山容がガラリと変り、険峻で奇異な感じがする。今回出品した西壁は、ヨーロッパの代表的なスキーツアーコースであるオートルートの最終コルであるバルペリーヌから画いたもので、その時の感動は終生忘れられないものであった。

もう一点は、ツェルマットからのマッターホルンである。西壁の作品の左側をまわり込んで、北壁をみながらツェルマットに入る東北壁と云える。

これまで春夏秋冬と十回以上、この地を歩いてきたが、相性が良いのかゲンがいいと云うのか、マッターホルンが見られなかったことは一度もない。有難いことである。

私が画く山の絵は、出来るだけ登ることにしている。その山に登ることによって、苦しさや、きつさを通りこして、何か親密さを感じとることが出来るからだ。

山登りはつらければつらいほど、苦しければ苦しい程、それを乗り越えて頂きに立った時、何ものにもかえがたい素晴しい感動を与えてくれる。

マッターホルンは、私にとって最高の山であることはたしかだ。

マッターホルン西壁

双六岳のお花畑

高橋　てる子

双六岳には、三回登ったが、始めての登山は、今年五月天国に召された山男の夫との山行であった。

三俣蓮華の展望の良い縦走路。雄大な薬師岳、野口五郎岳。左側は、岩肌の水晶岳、驚きの山容は貫禄充分の鷲羽岳である。私の気分は上々で、有頂天になって山々をスケッチした。なんだか調子が良く描けて、自分でもうれしくなって、元気に双六小屋泊。

朝、今日も晴天。人いっぱいの小屋を出て、キャンプ場と池をぬけて、小高い尾根を登り笠ガ岳の三角が大きく見えて歩いていると、夫が「腹の調子が良くない、小屋のトイレまで行って来るから動かないで待っている事」と言ってスタスタ登って来た道を下って行く。その姿は、ハイマツの中に消えた。

ぼんやり見ていたら、その広い窪地を双六小屋に向かって、長身の特徴のある夫の後姿が出て来た。サッサと急いで歩いている。

私はおかしくなって、カメラのシャッターを切って写した。

青い空に、それ以上に青く輝いている槍穂高のシルエットを見ていて、稜線を見ると黄色のシナノキンバイ、白いハクサンイチゲが美しく咲き誇っていた。その一面の花畑に感動して、待っている間にと、描き始めた頃に、もう夫は戻ってきて、「あースートした」とお腹をさわって、テレ笑いをして、又歩き始めた。

私も後を一緒に歩く。

そんな変な想い出は、後姿の写真と共にある双六岳のお花畑である。

パパ!!　天国には、双六岳　ありますか？

双六岳のお花畑

憧れのランタン谷

田中　泰道

四月初め、イギリスの登山家・ティルマンが「世界で最も美しい谷」と紹介したランタン谷、標高五〇三三mのヤラピークを目指し、カトマンズからヘリでゴラタペラへ、ランタン村を経、キャンジンゴンパへと入った。三八四〇m、深かった谷がU字谷となり明るく、開けた所で古いゴンパがある。谷の正面には、ガンチェンポ、その右にポンゲンドプク、ナヤカンガ、左にはキムシュン、ランタンリルン七二四五mと五～六千m台の山々に三方を囲まれ、素晴らしい。翌朝まだ薄暗い中、外に出ると眼前にナヤカンガが白々と山頂付近に青氷をみせ聳えている。急いで部屋に戻りスケッチ用具を取り出して戻ると山全体が厳かに薄赤く染まりだし、心が躍る。デッサンをし、水彩で描き始めると描くそばから画面

ランタンリルン曙光

が凍り光る、初めての経験である。日が昇り描き終わってロッジの裏に廻るとランタンリルンが白く輝いていた。次の日は日の出前からランタンリルンをスケッチしようと早起きする。日の出の前後のすばらしい色の変化を見せてくれた。朱に染まりキムシュンの影を写したランタンリルンの姿が印象深く、今回の絵「ランタンリルン曙光」となった。

絵描きの引っ越し

千葉　潔

娘や倅が自立を意識し具体化する時期となって来た。そして親たる私、はたして真剣に自立と向き合ったかと振り返れば、成り行くままの人生を積んでいるような…。

大阪で生まれ育ち、本拠も大阪に置き仕事も続けて来たが、元来そこは父母がベース。己がベースを求めてみれば、自立を目指すには住み替えて、新しく生まれ変わる事も必要との思いに不思議に導かれて来た。

昨年秋そのような事を面々と人様に話したりもし、毎年展覧会をさせて頂いている上高地温泉ホテルの加藤映社長はじめ皆様に話してみたところ、住居を紹介して頂いた。いつかは大好きな信濃の山並が見える地に移り住みたいと、心の内で願って来たことが当々具体化しはじめた。

引っ越すとなれば当然心の整理もさる事乍、荷物の整理処分の戦いが始まった。

このような機会がなければほとんどの物が、さして重要とは思わない物ばかりである事に気付いたが、さりとて物にまつわる数々の思い出があるのも事実。

引っ越しのただ中で妻の言うに、「今決める事が出来ないものは信州で…」と相成り、要る物、さして要らざる物も含め3tトラックで二往復。松本へとたどり着いたのである。

人生の旅はこれからである。そこで私の人生に於いて今だ捨て切れず、持ち続けている…ものの処遇について、絵を描く事によって見極めて行きたい。

これからもご指導の程、宜しくお願いしたい。

槍ヶ岳（モルゲンロート）

北穂への想い

中村　勝久

北穂高

山高ければ谷深し。日本山岳画協会は、槍ヶ岳山荘の協賛で、毎年9月にスケッチ教室を開いていますが、この企画には毎回参加しています。山荘の主、穂刈さんのお話を聞いて北穂高を描きたいと希望を話したら、南岳小屋をすすめてくださいました。

高い山は、高い所から見よ。標高三〇〇〇メートル前後の、南岳小屋付近から見る北穂は、どこからの角度も絵にしたい構図ですが、目の前の大キレットとの落差には、声も出ず圧倒されてしまいます。

谷間のガスは、ゆっくりとして動かない時もあり、又ある時は逆巻き、すさまじい勢いで急上昇、急下降が繰り広げられます。不安になったり恐ろしくなったり、心細くなりますが、目の前の大自然の営みに、感動しています。

F-130「北穂高岳」この作品の完成に、三年通いましたが、北穂にどれだけ接近できたか、多分まだまだです。北穂自身に言わせれば、俺はこんなものじゃない!!

何時の日か、再度取り組みたい、北穂への想い、夢があります。

Beautiful Day

藤田　錦一

北八ヶ岳、中山付近から見た天狗岳の冬の風景を描きました。平成二十年、新年の八ヶ岳は晴天に恵まれ、稜線上こそ、風は強いものの、安定した気象条件のもと、快適な縦走を行う事ができました。

渋ノ湯温泉から入山し、樹林の中を汗をかきながら黒百合ヒュッテまで歩きました。時間に余裕があったので、小屋に荷物を置かせてもらい、東天狗岳までピストンしました。途中、踏み跡を見失い、コースをはずれてしまうというハプニングにも遭いましたが、雪山ならではの緊張感が無心に稜線上へといざなうのでした。稜線にとりつくと、強い風に

Beautiful Day

体が浮き上がる程で、何度もピッケルで耐風姿勢をとりながら、頂上にたどりつきました。東天狗岳の頂上からは地吹雪の彼方に美しく硫黄岳、赤岳、中岳、阿弥陀岳が輝いていました。体の疲れは一瞬にして吹き飛び、岩かげで風をしのぎながら、しばし自然と一体化するのでした。その夜は黒百合ヒュッテで、知り合った登山客と談笑し、心地いい酔いとともに眠りにつきました。

翌朝、下山するのが惜しく、後ろ髪をひかれるような思いで、この「美しい日」に感謝しました。

出品作品解説

牧　潤一

「湖上のヒマラヤ」油彩・P30号

イタリア側から見たモンブラン

チベット高原のマナサロワール湖畔北側から望む「ナムナニフオン」(中国名グルダ・マンダータ)七七六六m。河口慧海はネパールからこの山の向かって右側の峠を越えてチベットに入った。

「イタリア側から見たモンブラン」水彩・44×77㎝。アントレープ付近から。

「エベレスト山」油彩・30号(本号表紙写真)

ゆうまでもなく世界の最高峰八八四八m。ネパール・ゴーキヨピークから。

左手で描く

増田　欣子

山に魅せられ、山を描いて三十年ばかり、私の絵描き人生の半分は山と山に関わる絵を描いていたことになる。

今から六年半前、元気がとりえだった私に突然の病魔が襲った。脳梗塞、右則麻痺。絵描きにとって決定的なダメージ。右手足は力無く、その時絵が描けなくなった自分に気付きはっとした。

左手がある…、子供の頃からやや左利きの傾向があった事を思い出し、左で描いてみた。少々頼りないが描けた。この日からリハビリにも力が入った。

現在では、右も家事をこなすまでに回復したが、絵は左である。大作の場合、腕を上げて長時間保持するのが厳しいからだ。

都美術館に出品する大作は、結局一年休むことになった。

山に登れない山の絵描き、作品の前で言い訳はできない。できる事と言えば長い取材の体験を熟成させ、それを作品として発表する…ただそれだけである。

目をつぶれば、穂高の紅葉、チベットの山河そして氷雪のヒマラヤ、それらの山々は私の脳裏でより一層の輝きを増してくる今日この頃なのである。

剣岳初秋

制作余話　―月下の鹿島槍岳と春望白馬三山―

若林　晴男

鹿島槍岳は我が家の窓越しにいつでも見える山である。この山の様な双耳峰は他所の山系にも幾つかあるが、ここ鹿島槍岳の美しさは『日本百名山』の著者深田久弥ほか多くの人の認めるところで、特に厳冬期の雪を頂いた姿がよいと私は思っている。描いた場所は木崎湖畔を少し登った黒澤高原トレッキングコースの一角、夜明の暁闇から薄明に至る僅かな時の神々しさは格別で、何とかその印象を画面に残したいと思いつつ、今回の作品に取り組んだ。

もう一点は白馬三山の遠望、長野と新潟の県境の小谷村にある「眺望の郷」という高所の公園で描いた。丁度八重桜が満開となり、辺り一帯の木々は新緑に萌え、新生の喜びの空気を浴びながらの写生だった。完成させる為に再度訪れた日には園地の一隅に麓の村人たちが集まって、お花見の宴が始まり、絵を描いているどころの沙汰ではなくなって仕舞った。また「眺望の郷」に至る道には熊出没注意の貼紙があって、一人で来るのは一寸怖い所なのだとつくづく思った。

月下の鹿島槍岳

山と博物館　第53巻　第9号
二〇〇八年九月二十五日発行
発行　〒398-0002　長野県大町市大町八〇五六・一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一・二二一・〇二二一
FAX　〇二六一・二二一・二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku
印刷　有限会社　北辰印刷
定価　年額　一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇・七・一三二九三

R100　PRINTED WITH SOY INK　この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。